
春雷

大沢 綾子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春雷

【Nコード】

N9162I

【作者名】

大沢 綾子

【あらすじ】

新聞記者、赤座敦の手に祖父が残した印象的な、古い写真。その写真に導かれるようにして、彼は仕事である画家に出会っていた。

アカザアツシ
赤座敦がその写真を手に入れたのは、祖父の遺品を整理していた時だった。

老人ホームから送られてきたダンボールの中にそれはあり、あちこち擦り切れて変色してしまった布表紙のそのアルバムは、開けば古色蒼然と昭和初期の匂いがする。

写真は赤茶けて薄くなり、現在のアルバムとは違ってCD-Rに焼くデジタルでもなければ、フィルムで覆う方式でもない。写真は四隅を三角の紙で止めてある。

中国北京の爆撃の跡や、立ち昇る黒煙、当時としては繁華な上海の様子がそこからは見てとれた。詳しいことは、昭和も末の生まれの赤座にはわからない。戦争のことなど、何一つ興味を持たずに育ったからだ。

が、几帳面な祖父の字が写真の中には記されている。それを読んで初めて、赤座は祖父が中国戦線にいたこと、一兵卒として敗戦後しばらく中国で抑留されていた事を知った。

姿形は似ているとよく言われたが、おそろしく影の薄かった祖父の過去にそういう青春があったことに新鮮な驚きを覚え、まるで別人の人生を眺めているような気持ちでそのアルバムを繰っているときに、たった一枚　その写真が紙の台紙の隙間から落ちていた。拾い上げてふと見ると、裏には祖父ではない筆書きの文字がしたためられてある。旧仮名遣いの文字の読みにくさに、赤座は少し甲高い声を出していた。

「明治三十年、四月……これ、二十三日か？」

そして、縦書きに人の名前らしきものが三つ。

赤座徳次郎。

萩原千……。

倉田光太郎。

真ん中の名前は、最後の一字が消えてしまっていた。改めて表に返すと写っている人物は三人だった。左の男は背が高くなかなかの男ぶりで和服を着流して腕を袖口に入れて腕を組んでいる。右側は、これはおそらく曾祖父だと思しき人物だった。頭は丸坊主に刈っており、日焼けしてお世辞にもモテる顔とは思えない。

そして赤座は、ふたりに挟まれている中央の少年に目を奪われた。最初は、少女なのかと思った。が、よく見れば着物の柄やその髪型から違うとわかる。いくら歴史に疎い赤座でも、当時の風俗として女の短髪があり得ない事ぐらいは知識として知っていた。

そう思っただけでも、あどけない少女のような容貌と華奢な身体の細さに、つい幻惑された。

その写真はどうかやら、ただ挟まれていただけらしい。落ちたと思しきページには、空白部分がひとつもなかった。そして、赤座はもう一枚の写真に気づいていた。

貼り付けられている写真の一枚に、その少年がもう少し大人になったような人物が写り込んでいた。もつとも、これは女性だと思えた。長い髪を結び、チャイナ服を身につけて椅子に腰かけ、その後ろには若い頃の祖父が軍服姿で写り込んでいる。昭和十九年十二月の日付で、場所は中国のどこかの都市だ。

「なんだ、これ？」

どういう事かと訊きたくとも、答えは祖父と共に墓場の中だ。

「爺ちゃんの恋の名残かなあ」

邪魔だといって燃やしてしまうわけにもいかず、赤座はそれそのまま納戸に押し上げていた。

赤座は、新聞社の文芸部に所属する記者だった。本人は、サツ回りの国会に詰めるような記者になりたかったが、結局のところ入社して三年経ってもまだ文芸部にいる。美大を卒業し、作家になりそこねた赤座の経歴がその理由だった。

「赤座……！ 寝てばかりいるんじゃないぞ」

自分の片づかないデスクで、気がついたら居眠りをしていた。どうもこの季節、眠気が襲って仕方がない。前日の徹夜も効いていた。エッセイを頼んでいた作家先生が原稿を落としそうになってメールで送られてきたのが深夜。第一版に間に合わせる為に校正を入れて何とか突っ込みそのまま夜が明けた。

「ひでえなあ……」

乱暴に頭を殴って起こしてくれた先輩に、そう言う。先輩は苦笑まじりに、一枚のメモを渡してきた。

「おまえ、秋峯って画号の日本画家を知ってるのか」

「……はあ？」

言われて、寝ぼけた返事をした。

「いや、聞いたこともないですけど」

「ふうん……でも、うちのデスクがインタビューを申し入れたら、おまえを指名してきたってよ。院展で賞を貰って画壇デビューして以来、一度もインタビューに応じないのがオーケーくれたってんで、デスクも仕方がないからおまえに行けってさ」

「……はあ。でも俺、そっちは専門外ですよ？」

「仕方ないだろう。まだ時間があるから、せいぜい勉強してから行くんだな」

渡されたのは、簡単な資料だった。秋峯という画家の作品と、受賞した賞。それ以外はほとんどの欄が空白のまま。本名も、年齢も出身地もわからない。が、一枚だけロング・ショットの写真が写っていた。

その写真を手にした瞬間、赤座は激しい興味に眠気を忘れた。

祖父のアルバムの写真、そしてそこから落ちたあの写真に写っていた人物に、彼は似ていた。

（……まさか）

が、ちよつと忘れられない印象的なその顔は、あの日以来赤座の脳裏に焼きついている。清楚で、弓なりの眉と凜とした眼元に艶のあ

る美しい顔は、近頃では見られない古風な顔立ちだった。

赤座は今でもそれが男とは信じられないでいる。むしろ願望として女性の理想像とまで思い始めているぐらいだ。その写真の人物に、秋峯は似ている。ひよっとしたら、自分と同じように血縁なのかも知れない、と赤座は想像した。

(それなら、話は訊き出しやすいかな)

ついでに、そっくりな妹でもいればいいな、とそういう期待を抱いて、赤座はその約束の日までの数日を日本画についての勉強と、画家の背景調査に費やした。

川田秋峯という新人画家には、謎が多かった。

ようやく手にいれた最低限のプロファイルは、どこの美大を出たかも不明のままだった。わかつているのは、彼の本名が川田護というごくありふれた名前ということと、年齢、出身地ぐらいだ。協会に問い合わせても、隠しているわけではなくそれだけしか情報がないらしい。その謎を解明する役目を赤座は、デスクからインタビューの概要メモと一緒に仰せつかってきた。

指定されたマンションへ向かう地下鉄の中で、赤座は強烈な印象のある秋峯の絵を思う。

美大で油絵をやっていた赤座にとってその絵は、結局ものにならずに筆を置いた赤座の心を妬くようなものだ。綺麗でまとまった絵なら幾らもあるが、秋峯のそれはどこかに鬼気迫るものを秘めている。決して居間に飾っておきたいと思う絵ではない。

加えてあの美貌だ。

近年は作品よりも作家のビジュアルが先行する向きがある。そういう点で秋峯は低迷しがちな日本画壇に新風を吹き込むかもしれない人物だった。

そして、赤座のスーツの内ポケットには例の写真二枚がはいつていた。これを見せたときの相手の反応が知りたかったのだ。

本物の川田秋峯に赤座はまともな挨拶も出来ないほどにあがつてしまい、不躰な眼差しを注ぎ続けた。どれほど失礼だと思っても、赤座は彼から視線を外すことが出来なかった。

(へぼカメラマンが)

あんな写真は、秋峯の美しさの百分の一も写していなかった。

ごく普通の白いセーターにベージュのチノパンツという姿で出迎えた秋峯は、想像以上に華奢だった。透きとおるような白い肌は、病弱なのかと思わせた。漆黒の髪は背中までの長さがあり、卵型の輪郭を覆っている。ふっくらとした朱色のくちびると長い睫毛のせいで少女めいて、やわらかな低い声も外見を裏切らなかった。

その容姿と秋峯の絵は、マッチしない。

秋峯の絵はどこか暗い脊筋をヒヤリとさせる湿った怨念を感じさせる。情念の画家、という評判がすであつた。そして、彼に注目が集まったもう一つの原因は、その画風だ。

昭和前期にわずか二年で姿を消してしまった画家、前田秋人の画風とそっくりだった。画壇ではそのせいで、秋峯が彼の後継者ではないか、という噂が流れている。

現存している作品は五点のみだが、本来華やかであるはずの色も前田にかかれれば暗く沈む、と言われたその色彩感覚が、秋峯には共通していた。

赤座は、それを聞いてこい、とデスクに厳命されている。もし、秋峯が前田の血縁だとしたら、ちょうど孫か曾孫ぐらいになる。公表されている二十四歳という年齢が本当なら、前田が消えた年齢から逆算して曾孫かもしれない。そこに、写真をぶつければ正直な話が訊けると思っていた。

お定まりの概要部分が終わって、赤座は出されたコーヒーにやつと口をつける。

秋峯は、インタビューの間じゅう微笑を浮かべていた。そのあるかなしかの微笑みに赤座は魅了されている反面、どこかにひんやりとしたものも感じていた。

そして、いよいよだ、と赤座は内ポケットから例の写真を取り出していった。

「先生は、前田秋人画伯はご存じない、とおっしゃいましたが」

そう言いながら、赤座は写真をガラスのテーブルにすべらせていった。リビングは春の日差しを受けて暖かい。レースのカーテンの向こうでは、午後の明るい光が踊っていた。

「この、二人の人物についてはどうでしょう？」

そっと、秋峯の白い手が写真の隅を押さえていた。青い血管が透けて見えるほど、華奢な手だった。

「これは……どこで？」

問われて赤座は、事情を説明した。その途中から、秋峯の微笑が深く冷たいものになる。それはまるで、少女がいきなり女になっただよな錯覚を赤座にもたらした。

「赤座徳雄さん……知っていますよ。だって彼は、六十二年前の中国で僕を殺したんだもの」

部屋の温度が、一気に下がっていた。

赤座の腕に鳥肌がたつ。視界が突然暗く陰って、音が消えたような気がした。

「あなた、僕がどうしてもわざわざ指名したと思ってるんです。僕にとっては、忘れたくても忘れられない男の血がこの世にまだ残っている。その事が許せないからなんですよ」

やさしい微笑は妖しいものに変わっていた。ゆったりと話す口調には、冷たい刃が忍びこみ、赤座は命の恐怖を感じた。こちらに向かってくる秋峯にゾツとした。

なのに、ソファから立ち上がることさえ出来なかった。

「赤座さんはね、僕の大切な人を最初に殺した。それから、次に僕を殺した……」

自分のほうにのびてくる、細い腕　首にかかった手は、冷たく湿っていた。そくり、と背骨を恐怖が走り抜ける。

「か、川田さん。お、俺は……じ、爺ちゃんじゃないですっ」

「でも、僕のところに来てしまったでしょう。僕の夢を見たじゃないですか」

事実だった。赤座は彼を　　というよりも彼そっくりの女性を夢の中で見た。

どうして、彼はこんなにもやさしい口調のままなのか、とどこか楽しそうに微笑んだままの秋峯を赤座はかすむ目で見返す。

(どこかが、狂っているのかもしれない)

赤座は、頭の中でそう思う。まともに考えれば、赤座の祖父が彼を殺すことなど不可能だ。しかも、六十年以上昔の中国では絶対出れないことだ。

「ま、待って……」

やっと、赤座はされるがままの態勢から立ち直って秋峯の細い手を握む。しかし、どこにそんな力があるのかビクともしなかった。

(俺……死ぬのか。殺されるのか)

確たる理由もわからないまま殺されるのか、と無念さが突き上げてくる。

それを救ったのは、突然現れた人間の気配。次第にかすんでいく意識の背後でガチャンと物が落ちる音がする。その気配はしだいに近づいてくる。

見えないにも関わらず、赤座はその圧倒的な存在感を感じた。

「やめなさい、千秋」

秋峯のそれよりも太い手首が、赤座の視界に入っていた。しかし、男の顔は見えない。呼吸が出来ないために、視界が酸素不足で暗くなっていた。

「千秋……彼は、徳次郎じゃないよ。わかってるんだらう？」

じりじりと、首にはめられていた鉄の輪がゆるむのを赤座は感じて、慌てて息を吸っていた。少し光を取り戻した視界の中で、秋峯の綺麗な漆黒の瞳が涙に濡れているのが見えていた。そして、男の横顔も。

「だって……光太郎さん」

甘えたような細い声で、秋峯が男に腰を抱き支えられ白い頬を骨太の手のひらに預けて見上げていた。

「眠りなさい……まったく、こんな馬鹿なことをして」

「……長すぎて。何もかもが、長すぎるから」

泣きながら訴えている秋峯のくちびるを、男のそれが覆っていた。赤座はそれを、魅入られたように見つめる。目の前のふたりが男同志だという事も思わず、ただ男のやさしい所作とすべてを預けきった秋峯に見とれていた。

くちびるが離れたあと、くったりと力の抜けた身体を支えたまま、男が赤座を見る。そこにある表情は、暖かい笑顔だった。

「赤座さん、そこに居て下さいよ」

そう言つと、軽々と秋峯の身体を抱き上げて奥の部屋に消えていった。

その背中を呆然として見送つたあと、赤座は慌ててテーブルの上の写真を引き寄せた。そこに、その男が映っている。倉田光太郎。秋峯にそっくりな青年の隣にいるのは、確かに今の男だった。

(そんな、馬鹿な……)

食い入るように写真を握りしめて見つめていると、いつの間にか男が傍で見下ろしていた。

「そんな写真が、まだあつたとはね」

自嘲している顔は、古い映画の「銀幕スター」のように整つた男っぽいものだった。濃紺のボート・ネックのセーターとジーンズ姿は現代風だが、二重の切れあがつた涼しげな眼元には古い叡智が感じられる。

「その写真が、あなたを千秋の元に呼んだんだろうな」

「……呼んだ？」

意味がわからずに問いかけると、向かい側のソファに腰を下してゆつたりと微笑み返されていた。秋峯とは違い、男からは暖かな雰囲気を感じられる。

「さあ……これから私が話すことを、信じられればいいんだけど

ねえ」

そして、倉田光太郎は話し始めた。

倉田は、東北の造り酒屋の長男に生まれた。明治六年のことだ。

「私の母は、私の前にすでに二人も子供を流してしまっていてね。

今度の子は無事に生まれるようと、近くの竜神様に毎日願かけに通ったらしいんですよ」

村の傍に冬でも凍らない沼があった。そのほとりに小さな祠があって、倉田の母親は毎日通ったらしい。どんな願いをこめたのか

倉田は無事に生まれたが、その母はお七夜も済まないうちに他界した。

結局、乳飲み子を連れた父親はその世話に窮してすぐに周囲の勧めで後妻をとった。

「もう、皆いませんがね。私の下には弟が二人と妹が一人いました」
倉田が、自分のおかしさに気づいたのは日清戦争のときだった。

元々、あきれるぐらいに丈夫で風邪もひかなければ、怪我とも縁がないまま成長したという。

話を聞きながら、赤座は自分の頭がどうにかなってしまいそうだった。明治生まれの人間が、目の前に三十を幾つか越えたほどの姿で存在している事を、理性が受け付けない。

「私の部隊は、金華山を攻めましてね。そう言っても、おわかりにならないでしょう。朝鮮半島にある小さな山の事なんですよ」

左右で戦友達に弾が当たって傷ついていく。倉田には当たっても、弾はゆつくりと皮膚の下から押し出されてきてポロリと落ち、その傷はすぐに治ってしまった。

「いったい、母はどんな願かけをやったものだろうと思いましたよ」
五体満足で戦争から帰ってきて、倉田は自分の異常さに悩んだ。

そして、やらずでもの事を試した。沼で、入水自殺を図ったのだ。

「いやあ……参りましたよ。死ねないなんてもんじゃない。水の中

で呼吸をしてるんですからねえ」

「なにか、お芝居でもやってるんですか。こ、こんな冗談」

倉田の軽い口調につい、騙されているのかと赤座は怒りだした。

「ひ、人を担ぐにしたって冗談がすぎませんか」

「冗談であればね。本当に……そうすれば、千秋だって苦しまない
真顔で言われて、赤座は言葉につまっていた。

(そつだ。彼は……)

思わず閉じられたドアを見た赤座の視線を追うように、倉田も同じ方向に顔を向けた。

「千秋は、私の従弟です。小さな時から病弱で……」

日清戦争終結から十年後に起こった日露戦争にも、倉田は出征した。当時すでに三十二歳だった倉田は、自分の弟にきた赤紙をひたたくって出征したのだった。

「家業は、弟に継がせるつもりでした。どのみち私では、無理でしたからねえ」

すでに倉田は、自分がただ長生きをするだけなのか、それとも永遠に生き続けるのかわからなくなっていたのだ。

「あの戦争では私はずっと、旅順にいましたよ……」

赤座の前で、倉田が一瞬遠い目をしていた。

ふっと、赤座でさえ砲弾と肌を刺す朔風を感じていた。眇々と吹く風と人間の悲鳴と呻き声が聞こえるようだった。

「千秋は……私が出征するという前夜、私のところへ来たんです」

倉田には、その理由がわかっていた。

当時倉田は、母屋からずいぶん離れた部屋にひとりで住んでいた。すぐ下の弟が可愛い妻を得て、家業も継ぐ事が決まったからだ。いわば厄介者になってしまった三〇すぎの兄など、同じ屋根の下にいてはつまらぬ噂のタネになる。それを見越しての事だったが、倉田はどうせ今度も死なない、と思っていた。

しかし、千秋にとってはそうではなかったらしい。今度こそ、倉田は還ってこないかもしれない、とやっと二十歳になったばかりの

千秋は病軀をおして倉田の元に戻ってきた。

「結核だったんです……一年、寝たり起きたりでね。当時は、肺病というのは不治の病になっていましたから、きっと本人も諦めていたんでしょう」

いつからか、その従弟の瞳のなかにある想いに倉田も気がついてきた。甘い憧れを宿していた瞳が、次第に許されない恋情に染まっていたのはわかっていた。それに触れずにきたのは倉田自身が、自分が普通ではないとわかった時点で愛も恋も諦めていたからだ。

が、このままでは結局この若い従弟は恋ひとつ知らぬままに終わることになる。男の肌どころか、女の肌さえ知らずに散っていく。そう思えば、倉田はどうしようもない憐憫にとらわれた。

兄さん、また行くのでしょうか？

黒い瞳に涙を溜めたまま、その先をどうしても言えずに黙って見つめている細い身体を抱きとつたのは、倉田だった。

還ってくる。必ず。だから、それまで待っているよ。

白い裸体を倉田の腕の中に預けて、安心しきったように千秋は頷いていた。はい、と返事をしていた。

娘のようにおさげに編んでやったことのある長い髪が、白い夜具の上に扇のように広がっていた。伝染ることを恐れて誰も触れなかつたくちびるを、やさしく吸う事を繰り返す。

強く力をこめれば折れてしまいそうに細い身体を、倉田は抱いた。赤いくちびるから漏れる歓喜の喘ぎと、堪えてもこぼれる泣き声を受け止めてやった。

すべては夜の底に沈んで、ほかには誰も知らない命のきらめきになるはずだった。

「それが……こんな事になるとは、私も知らなかった」
約束をした。

待っている、という倉田の願いが悪かったのか。それとも、千秋の中に注ぎ込んだ自らの精にその力があつたのか。千秋の身体は、倉田が出征して旅順要塞の砲台に晒される頃には回復し始めたのだ。

「ま、待つて下さいよ。それと、俺の祖父にいったいどんな関係があるっていうんです」

いつまで続くかわからない話に焦れて、赤座はたまらず割って入った。

「赤座徳次郎、つまり赤座さんの曾祖父が千秋を目覚めさせてしまったんですよ」

返ってきた倉田の表情は、哀しみに彩られていた。その手がのびて、テーブルの上から古い方の写真を取り上げていた。

「徳次郎は、私より七つ下でした。千秋が好きでね……」
あつ、と赤座は声をあげた。

「たぶん、私が出征したあとで徳次郎は千秋が変わったことに気づいたんでしょう。あるいは、徳次郎の本気に千秋が喋ってしまったのか」

徳次郎は、倉田より遅れて召集されてきた。朝鮮半島の根元で別れる列車の線路が、その後の悲劇を生みだした。右に曲がれば沙河会戦だった。赤座徳次郎を乗せた列車が旅順に向かったせいで、倉田と徳次郎は会ってしまった。

「嘔き出したんですよ……男の、嫉妬が」
苦々しげな声だった。

戦場のどさくさにまぎれて、倉田は徳次郎に銃剣で刺されて死んだ。

「死ぬとは思っていなかった」

自分に呆れているような口ぶりで、倉田は苦笑っていた。

自分を刺した剣先にこめられた想いが現世での命を絶ち切り、結局はその後何十年も甦らせなかつたらしい、と冷静に分析する男を赤座はまんじりともせずに見つめた。

「そ、そのあと……なにがあつたんです」

赤座は、訊きたくない気持ちに封をしていた。

「いったい自分の先祖は何をやったのか　それを知りたかった。」

「千秋は、戦後もずっと私の帰りを待つていたそうです」

その戦後が、明治三十八年以降のことだ、と赤座は改めて自分に言い聞かせる。そうでもしないと、ごちゃごちゃになりそうだった。赤座徳次郎は片脚を命の代償に、生きて戻った。そして、しつこく千秋に言い寄った。しかし、その想い人が絶対に首を縦に振らないとわかって、残酷な事実を告げたのだ。

ちがう、ちがう。約束をしたもの……兄さんはちゃんと還ってくる！

それでも、何年経っても倉田は戻らずに、ついに諦めた。萩原千秋の絶望は深かった。

「何度もね……死んだそうですよ」

私はね、と倉田が昏い眼差しで呟く。

「どう言えればいいのか……確かにその時うつし身としては存在してはいませんが、それでもずっと千秋を感じていましたよ。あれが、身を焦がすようにして死にとり憑かれてあらゆる事を試すのをね」

でも、死ねない。そういう風に、倉田がしてしまったからだ。

再生するたびに、絶望を深めていく。それでも千秋は、原因が倉田にあると想像した事もなかった。すべては、自分の業の深さだと思っていたという。

「あの姿のまままで時間が止まり、死ぬ事も出来ずにずっと……とうとう、故郷にいることさえ出来なくなつて満州に渡つたそうです」
中国で、萩原千秋はあちこちを転々としながら名前を変えた。時には中国人にもなった。そうやってさえ、一か所に長く留まることは不可能だったらしい。それでなくとも、あの容姿は目立って仕方がなかったのだ。

昭和に入って日中戦争が起こり、やがて戦火は拡大した。相変わらず千秋は中国に留まつたまま、日本軍が押し寄せて来た時には中国人として春をひさぐ商売をやっていたらしい。

「そこで、祖父が……？」

恐るおそる赤座が訊く。返ってくるのは、やさしい微笑だ。

「声をかけたのは、千秋ですよ。赤座さんのお祖父さんは徳次郎さんにそっくりだった。出会って、千秋の中で過去が甦ったんですよ」

意識して女装しなくても、女物の衣装を纏えば千秋は女に見えた。その姿で若い赤座徳雄に声をかけた。記念に、と写真を撮らせたのはその先まで続く血脈への呪いだっただのかもしれない。実際、二枚の写真が赤座を呼んだのだから。

「あなたのお祖父さんの場合は、後からこの徳次郎と映っている写真を見つけたんでしょう。その時は、千秋が何者なのかは知らなかったと思いますよ。だから、お祖父さんの場合は今で言う正当防衛になるんでしょうね」

「でも……殺した？」

「死にはしません。千秋も私も」

ふっと、倉田の視線が逸れていた。赤座もつられて追ったその先に、目覚めたらしい秋峯 萩原千秋が立っていた。

赤座と対峙していた時とは、雰囲気が違う。頼りなげで、儂い印象ばかりが目立った。

「でも……ずっと僕を一人にしておいた」

「……おいで」

倉田ののばした手に吸い寄せられるように、千秋の細い身体が動いていた。抱きとめて、甘えたような恨み事を倉田が笑顔でなだめている。

「赤座さん……私が千秋の元に還ってきたのは大東亜戦争後のことです。昭和三十八年……それまで千秋はずっと一人だった。そして、あの絵」

赤座に向かって話しかける倉田に肩を抱かれて、胸に頬をあずけたままで千秋が目だけを赤座に向けていた。

「前田秋人とは、満州で出会いました。彼は政府の方針で満州への移住推奨のための絵を描くために来ていたんです。やさしくて、狡い人でしたけど嫌いじゃなかった。だから彼が帰国するときに、僕

の絵を黙って持ち逃げしてもそれは別に構わなかった。そして、秋峯として絵を描いたのは……光太郎さんがうるさかったから」

恨ずるように見上げる千秋の目は、甘かった。

「もったいないだろう。せつかくの才能が」

「だからって、院展に応募するなんて一言も言わなかったでしょう」
ぶつくさ文句を言っている千秋は、赤座の目にはこれまでで最も愛らしく映った。明るい笑い声をあげている倉田の腕の中で、千秋も仕方なさそうに笑っていた。

「……ごめんなさい」

少女が困惑したような表情で謝られて、赤座は慌てて首を振る。

「赤座さんが悪いのではないと、わかっていたのに僕は」

「俺も、知りませんでしたから……でも」

参ったなあ、こんな話は記事にならない　とこぼすと、倉田が笑っていた。その背後では、天気予報になかった雷が鳴っている。

「心配いらぬ。これは、夢ですよ」

倉田が言う。

その笑顔は謎めいていた。背後のバルコニーへ続く窓は、急激な気候の変化に黒雲が渦巻いて空を覆い始めていた。

倉田が、隣に座る千秋に微笑みかけてゆつくりと手をとって立ち上がる。

「赤座さん。後日あなたはここへ来て　絵だけが残った部屋を見つけるんです。前田と同じように秋峯は消える。私たちは、長くこの土地に留まりすぎた」

この写真は貰って行きます　と、古い二枚の写真を倉田が取り上げた。そして、千秋を抱き上げてバルコニーへと出ていく。

カーテンがはたためいて、横殴りの雨が吹きこんできた。雨はいまや、嵐の様相を呈し始めた。

「ど、どういふ事です。どこへ行くんですか。一体、あなた達何者なんですよ！」

赤座は慌てて後を追う為に腰を浮かす。

「赤座さん、私はね、竜神の化身です。母が何があっても死なないように、と願ったことがこうなった」

ふわり、と二人の身体が中空へ踊るのへ赤座は絶叫していた。が、その眼の前で激しい雨と同時に落雷の光が炸裂する。

その光の中に赤座は、確かに青黒い鱗をきらめかせた竜と、白い身体をくねらせる蛇を見たと思った。

「赤座……！ 寝てばかりいるんじゃないぞ」

はっとして、赤座は自分のデスクから顔を上げていた。

(……夢?)

それにしても、あまりに生々しいと頭を左右に激しく振って眠気を追い払おうとした。起こしてくれた先輩が、すぐ隣に立って見下ろしている。

「おまえ、秋峯って画号の日本画家を知ってるのか」

(……え)

一瞬、夢とまったく同じに繰り返される先輩との会話に、恐怖を覚えた。

が、その夜自宅に戻って不思議に思いながら納戸から降ろしてきたアルバムには、あの写真はどこにもなく、ページに一か所空白だけが残っていた。

そして 約束の日、赤座はそのマンションで倉田が言った通りのものを見つけた。

マンションの部屋は鍵もかかっておらず、家具もないガラんとした空間になっていた。しかし、リビングの中央には筒状に巻かれたものが三本あった。

たったの三点だけ残された装丁されていない絵は、萩原千秋の長い孤独と苦しみを現したような緋色の牡丹。散りゆく桜と院展で受賞した燃える金木犀。

その傍らに、竜の文鎮で一枚の手紙が押さえてあった。

赤座様。

下記の弁護士に連絡を取って下さい。
この絵の権利を、貴方に渡します。

秋峯

その手紙を手に、赤座は文芸部のデスクにあてて電話をかける。

「あ、編集長？ 赤座です……今日、川田秋峯先生からキャンセルの電話ありましたか？ いまね、指定された部屋に来たらね、誰もいないんですよ」

その声は、まだ夢の中にいるように妙に間延びしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9162i/>

春雷

2010年10月8日15時13分発行